



# きらつと教育

晩年を迎えたあるシスターは余暇を利用して随筆を書き始めました。過去を追憶しながら、あるいは、日頃から考えていることなどを気の向くままに書き留めた文章の中に「きらつと光る」教育的な示唆があります。

8回シリーズの最終回です。どうぞ、お楽しみください。

## 8 私の母

最近、折にふれて母がなつかしい。

8人の子供達がいる、朝に夕に、掃除、洗濯、食事に追われたが、一言も愚痴をもらさず、子供の話を聞いては一緒になって笑った。

台湾から引き揚げて、無一文になった我が家、母は、朝夕新聞配達をし、死ぬまで背筋を伸ばし、足はしっかりと立ち、足早に歩いた。楽しい家庭であった。

私の女学校時代、おやつを食べていたら、めずらしく熱い茶を入れてくれた。

いやこれは、これは珍しい事もあるんだなあと心の中で苦笑した。

「あなたね、父の顔にドロをぬるような事、やめてくださいね」

「へえー、ドロをぬる。夜は遅く、朝も遅く起きる。ドロなんか、いつぬるのですか」と私は反発した。

「又、へりくつ。あなた、何かうならなかった」。あー、やられた。学校に呼び出されたのだなと思った。

ある日、浪花節の好きなメンバー3人が、先生に内緒で大会を開いた。

一人は「すずきよねわか」。一人は「天中軒雲月」。私は「広澤虎造」の森の石松を演じ、拍手喝采を浴びた。翌日の国語の時間が始まる前、先生が「昨日の森の石松、うまかったなあ」と言った。

「あっ、しまった。こっそりやったのに、ばれていたんだなあ」。母さんは学校に呼ばれたんだなと気がついた。

母は「やめなさい」とも言わず、にやっと笑った。「馬鹿は死ななければなおらない」と、浪花節のふしで言って、食卓から立って行った。

「何よ、自分だっとうなっているくせに」と私はそこにおいてあったピーナッツを全部食べてしまった。怒ると食べるくせを母は知っていて、いつも食べるものがおいてあった。あまり叱ることはしない、だまって聞いてくれる母だった。

子供達の遠足の時は、巻きずしを作ってくれた。子供達の遠足の日がちがうので、遠足の季節は大変そうだった。いつもその度に台所に行くと、「まだ早い、いっておやすみ」と言って、巻きずしの端を口に入れてくれる母だった。

私が修道院に出発する日、母は私の肩をさすりながら言った。「あなたが生まれた時、占いにみてもらったの。あなたは弘法大師の足の裏から生まれたとの事。母さんは、あなたは将来何かあると心配したの、この道だったのネ」と涙をこぼした。

「元気で。母さんはあなたと一生、生きていたかった」。

後日、「あなたが兄弟中、一番幸せだね」とほほえんだ。母と写した写真、すごく平和なほほえみの母。一度、母を温泉につれて行きたいとおもいつつ、実行できなかった心残り、孝行したくても、その時、親はなしという言葉を出している。

(シスターK.M.)